



2018/ 9.1 SAT -7 FRI

高い研究倫理を 東京大学の精神風土に

研究倫理に関する問題は、たとえ一件でも発生すれば学術研究に対する社会からの信頼を大きく損ないます。
東京大学は「研究倫理アクションプラン」を策定し、
学生及び研究者に対する教育・研修や啓発活動の充実などの取り組みを進めています。

研究倫理セミナー

研究不正のリスク要因と対策・防止について考える
～あなたの一言が不正を促す～

2018年9月4日(火) 9:45～12:00

場所: 情報学環・福武ホール 地下2階福武ラーニングシアター

今年度の研究倫理セミナーでは、講演とパネルディスカッションによって、研究不正が行われる背景や状況、研究不正のリスク要因について議論し、健全な研究活動が行われる風土を醸成するにはどうすればいいのかを検討します。学内全ての方の積極的な参加をお待ちしております。また、研究倫理ウィーク期間中、各部局においても独自に取組を実施しています。

9:45～ 開会・挨拶

9:50～ 講演1「会計及び監査領域における不正リスク要因への対応」
講演者: 町田 祥弘 教授 (青山学院大学大学院 会計プロフェッション研究科)

10:30～ 講演2「科学者の信頼」
講演者: 横山 広美 教授 (カブリ数物連携宇宙研究機構、学際情報学府大学院兼任)

11:00～ 休憩(15分)

11:15～ パネルディスカッション「健全な研究風土の醸成について考える」

12:00 閉会

*タイムスケジュールは変更する場合があります。

研究倫理セミナーの講演&パネルディスカッションから考える

健全な研究風土の醸成とは？

講演 2

科学者の信頼

より



横山広美

カブリ数物連携宇宙研究機構
学際情報学府兼担 教授

※松澤孝明「わが国における研究不正・公開情報に基づくマクロ分析(1)」,「情報管理」6月号2013、科学技術振興機構
松澤孝明「わが国における研究不正・公開情報に基づくマクロ分析(2)」,「情報管理」7月号2013、科学技術振興機構

※「研究不正は病気のようなもので、予防することが大事。ただ、一度かかると途中で完治することは期待しにくい、と指摘する専門家もいます」と横山先生。

※Nakayachi K., Yokoyama H.M., Oki S. (2015). 'Public anxiety after the 2011 Tohoku earthquake: fluctuations in hazard perception after catastrophe'. Journal of Risk Research, 18(2), 156-169,



理系だけでも若手だけでもなく

研究不正として定義されているのは、捏造、改ざん、盗用の3つですが、不正に抵触するような不適切な行為は他にも日常に潜んでいます。アメリカ国立衛生研究所が2002年に医学系研究者3247人に行った調査では、33%の人が3年間で少なくとも一回は不適切な行為をしたと答え、社会に衝撃が走りました。アメリカでは1980年代以降、生命医学系を中心に政府機関の監査が始まりましたが、不正は毎年発覚しています。研究不正防止により重要なのは監査よりも教育だといわれます。

ここからは日本の研究不正に関する論文^{*}を元に紹介しましょう。発覚件数は2000年代に急激に増えました。インターネットの普及で発覚しやすくなったこと、また、政策として予算を集中投下したことも一因に挙げられるでしょう。分野別では、研究者数に対して件数が多いのは医学・歯学・薬学です。文系では、教育学、法学、経済などで、件数の多さが見てとれます。不正の種類は、全体では盗用が過半数です。文系だけだと不正の90%は盗用。理系では捏造・改ざんが多く56%、盗用は26%程度です。不正を起こす研究者の属性を見ると、学生が一定数いる一方で教員も非常に多いことがわかります。若い人だけの問題ではないのです。不正の理由として多いのは、研究をよく見せなかった、焦りがあった、不注意だった、など。教育で予防できる部分は一部です^{*}が、不正発覚の経路では、内部告発によるケースが多数でした。問題があったら周囲に相談するのが当然だという風土をつくることが重要です。

論文以外の不適切な事例ということで、欧州で大騒動になったクライメートゲート事件を紹介します。2009年、温暖化対策を議論するCOP15が開催された際、ある人物がイギリスの気候学者のメールをハックして公開しました。そこには説明用グラフのデータを改ざんしたという文言が含まれていました。元になったのは過去1000年の気温の推定データ。従来は過去100年程度しかわからなかったのが、樹木の年輪を用いる新手法で1000年単位

でわかるようになり、人間の活動による温暖化の証拠として注目されていました。実は元データは90年代後半に一部気温の下降を示していたのに、このグラフはその部分を削除していたのです。元論文は正しいのだから特に問題はないという主張も当時は少なくなかったのですが、論文であれば改ざんであり、不適切でしょう。これが科学不信の元凶となり、現在に続いているという人もいます。

科学者の不作為も批判の的に

もう一つの事例は、2009年のイタリア・ラクイラ地震です。当時、群発地震が続いて不安が高まっていた。騒ぎが広がるのを怖れた政府は、地震学者を集めて会議を開き、安全宣言を出しました。科学者なら絶対に出さないはずのものです。果たして、1週間後に大地震が発生、300人超の住民が犠牲になりました。政府の宣言を否定しなかった地震学者たちに強い批判が巻き起こり、起訴された結果、禁固4年が求刑されました。科学者は最終的には無罪となりましたが、同じ場いながら科学的に誤った言説を否定しないという不作為に対する科学者の責任が問われた一件でした。

2008年と2012年、私たちは科学に対する社会の不安感の変化を調べました^{*}。51項目にわたってハザードの不安評定を行うと、原発、地震、年金に関する科学への不安が増していた一方、それ以外の分野では減っていました。東日本大震災で原発と地震に関する科学への信頼は損なわれたようです。社会心理学の知見によると、信頼は能力と人柄(意図)で構成されます。多くの場合、研究者が信頼を失うのは後者。こういう研究をやりたいからこういうデータは出さないだろう、などと研究者の意図はレッテル貼りされがちです。

先日、「サイエンス」8月17日号に、日本は研究不正大国だという記事が出ました。残念なことですが、大学ランキング云々以前に、日本の研究は嘘だという印象を持たれているようです。不正をしないのは当然として、社会の信頼を大事にし、誠実な説明を忘れず社会と対話していく必要があると思います。

9月4日、5年目を迎えた研究倫理ウィークの特別企画として、研究倫理推進室主催による研究倫理セミナーが、情報学環・福武ホールにて開催されました。今回のテーマは「研究不正のリスク要因と対策・防止について考える～あなたの一語が不正を促す～」。講演とパネルディスカッションの模様をダイジェストでお届けします。

パネルディスカッション

健全な研究風土の醸成について考える

より

石井●研究倫理という「～しちゃいけない」から入ることが多く、つまらない印象を持ちがちですが、志を胸に研究するのに、足をすくうようなことは言われたくないですね。学生には、ポジティブに研究し、「RPM」を上げようと話しています。RはRespectで、過去・現在・未来における研究者への敬意。PはPrideで、この研究は自分が自分だから進められる、という自尊心。MはMotivationで、研究は重要だからではなく面白いからやるということ。RPMを高めれば、研究倫理に反することなく、科学者としても社会人としても真つ当に歩めると思っています。

清水●私はハラスメントの話題を提供します。ハラスメントと研究倫理は無関係に見えがちですが、不正の要因は動機と機会と正当化だという町田先生*の話を聞き、近いと思いました。ハラスメントが起きやすい状況というのは、下からの異議を受け付けられない関係性がある場合、組織内に同調圧力が働いている場合、組織防衛の要請が強い場合、問題の指摘や告発が困難な場合などです。そういう状況は、実は研究不正も起きやすい状況。東大では、性的言動に対して相手が不快と感じればセクハラだと規定されていますが、個人の感情の持ちようだけに着目するのは問題です。動機と機会と正当化でいえば、動機は個人の問題ですが、機会はガバナンス、正当化は組織文化の問題。組織に「腐ったリンゴ」がある場合、個々のリンゴを見てもあまり意味がない。制度面、集団の文化に注目すべきです。

田中●文系では、文献を読んで先行研究と対比させながら自分の思想を表明していきます。そこで起こる不正は、認識の甘さからくる部分が大きい。数年前、本

学の文系の若手研究者が先行研究の紹介に関する英語論文をそっくりコピーした事例がありました。調査の部分はきちんと書いたのに、先行研究を英語で紹介するのが大変ということで拝借していたようです。特効薬はないので、学生に日頃から繰り返し教育するしかないでしょう。

横山●石井先生が話したように、本来、研究は楽しいよね、というところに学生を引っ張ることが大事で、そうすれば自然と不正も少なくなるはず。研究倫理教育の機会にこそ、研究は楽しいものだと強調したほうが良いと感じます。

有信●私は民間企業が長いのですが、決まった仕事を義務的にやるのはつまらないものでした。創造的な仕事は面白い。研究というのは本来楽しいはずですよ。

清水●私、研究は楽しくないと思うんです。こんなことしても何ものならないかも、と思いながら日々やっています。研究は楽しいという点が強調されると、楽しくないといけないうってしまいます。楽しくないのが普通と言った方がいいのでは？

有信●確かに問題を抱えて唸っているときは楽しくない。でも、あるとき突然ブレイクスルーが来る。その途端、問題が一気に解決に向かう。この楽しさはなかなかほかでは味わえない。理系だとかいう経験を持つ人が多いんじゃないかな。

清水●文系でもそういうすばらしい瞬間



↑町田祥弘先生

●研究倫理セミナー プログラム

開会・挨拶 有信睦弘（研究倫理推進室長）

講演1●「会計及び監査領域における不正リスク要因への対応」町田祥弘さん（青山学院大学教授）

質疑応答及びミニディスカッション

講演2●「科学者の信頼」横山広美

パネルディスカッション

「健全な研究風土の醸成について考える」

石井正治（農学生命科学研究科教授）

清水晶子（総合文化研究科教授）

横山広美（カブリ数物連携宇宙研究機構教授）

田中巨（社会科学研究所教授）

司会：有信睦弘

はあります。ただ、研究は楽しくあるべきだと強調しすぎるのは大きな重圧になる、との思いです。辛いのに辛いと言えない雰囲気はよくないのでは？

田中●私も鬱々とした気持ちで論文を書くので、清水先生の話はよくわかります。理系では何か発見をするとそれだけで楽しめますが、文系では発見したことが真理かどうか自分ではわからず、他の人の反応があつて初めてわかります。そこは少し違うかもしれません。

石井●理系の不正ではねつ造が多いです。実験して思っていた結果が出ないから、と。でもそれは本来おかしくて、結果が出てからものを考えるのが筋。先に何か考えて、期待した結果が出ない、どうしよう、というのは逆。目前の事実をよく見て、そこから考える。仮説の検証はもちろん重要ですが、仮説が間違っていることは当然あると思わないといけません。

横山●研究室の雰囲気が競争的かつ協力的で、信頼関係があることが重要です。そのためには懇親会が大きな機能を果たすと感じます。能力や意図や人柄を一気につかめるのが、懇親会ですね。忙しくてもその機会を保つことが、信頼醸成、研究不正防止にもつながると思います。

パネリストの皆さん（左から田中先生、横山先生、有信先生、清水先生、石井先生）。

